

# 高齢化が進む中山間地域におけるまちづくり

## 「ものみりよくプロジェクト」

### Community planning in hilly and mountainous areas where aging progresses

堀川 涼子<sup>\*1</sup>

Ryoko HORIKAWA

#### 1. 研究目的

少子高齢化が進むわが国において、とりわけ中山間地域においては、高齢化の進行は急速であり、要援護者の増加など、さまざまな福祉課題を抱えた暮らしとなっている。また、高齢化とともに人口流出による過疎化が進み、公共交通の縮小や商店の閉鎖などによる生活課題が生まれている。これらの課題を解決し、住み慣れた地域でのいきいきとした暮らしを実現していくためには、これまでの在り方を超えた新たな方法が求められている。

こうした中山間地域における新たな方法への模索として、岡山県津山市加茂物見地区（H25年1月現在 人口140人・48世帯・高齢化率45.7%）を対象として、①地域住民②関係専門機関・団体・専門職（津山市行政・津山市地域包括支援センター（以下、包括）・津山市社会福祉協議会（以下、社協））、③美作大学 社会福祉学科（以下、大学）の三者が協働し、地域福祉の視点を基とした取り組みを試みている。

本発表では、大学生と大学教員、および包括・社協職員が協働で行った「生活ニーズ調査」の結果を基にし、これまで行ってきた物見地区での取り組みの分析を通して、中山間地域における地域づくりの方法とそのプロセスについて明らかにしていく。

#### 2. 生活ニーズ調査の方法と概要

2011年4月から5月の約1ヶ月間をかけて、当該地区の18歳以上の住民111人を対象に、他記式・質問紙法による聞き取り調査を行った。大学生と包括・社協・大学教員のいずれかがペアとなり、半構造化面接法により、調査対象者一人に約30分～1時間半の時間をかけて、住民一人一人の思いや考えを引き出し、語っ

てもらおうという形で調査を行った。

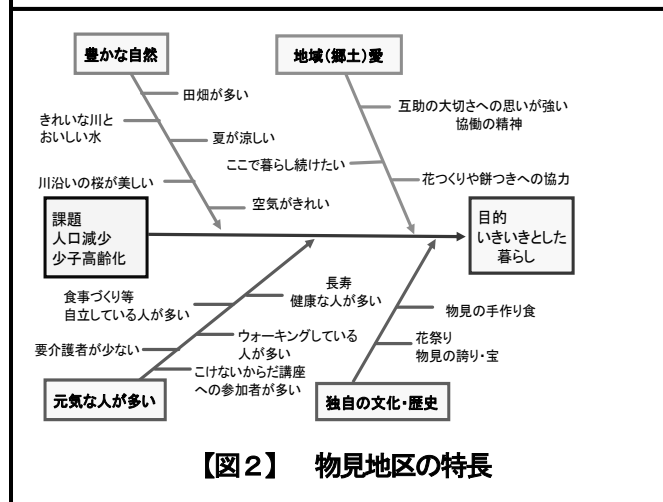
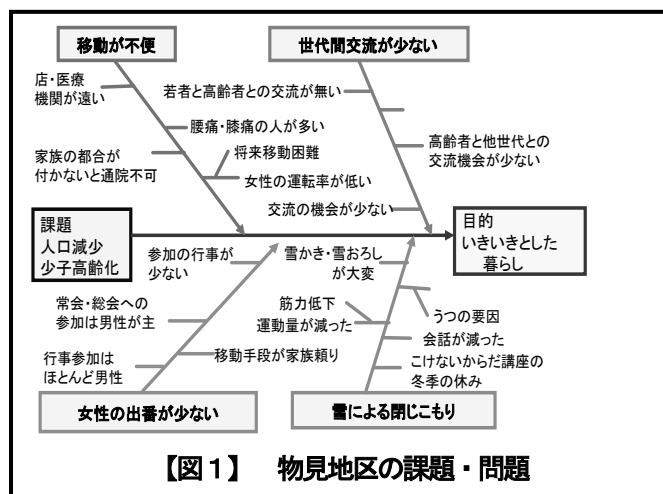
（なお、ニーズ調査に内容に関しては、昨年度の研究所報で報告済み）

#### 3. 内容及び考察

先の「生活ニーズ調査」の結果を基にして、フィッシュボーンの手法を用い、物見地区の地域課題・生活問題と同時に物見地区の特長の分析・抽出を行った。この結果、物見地区の地域課題・生活問題としては、「商店や医療機関が遠いこと」、「多くの人（特に高齢者）が家族の運転する車による移動となっていること」、「女性の運転率が低いこと」、さらには「腰痛・膝痛の人が多く移動に困難を抱えている」などの問題から「①移動が不便」というカテゴリーを、「若い世代と高齢者、高齢者その他の世代、さらには住民全体での交流の機会以前と比べて少なくなっている」などの問題から「②世代間交流が少ない」というカテゴリーを、「常会（定例地区会）・総会への参加は世帯主である男性が主であること」、「地区行事への女性参加率が低いこと」などの問題から「③女性の出席が少ない」というカテゴリーを、「雪かき・雪おろしが毎日続き、身体的負担が大きいこと」、「積雪により屋内での生活が多くなり、運動不足による筋力低下を引き起こしていること」、「屋内での生活のため他人との会話機会が減少し、精神活動の低下を引き起こしていること」、「介護予防講座『こけないからの講座』が冬季中止となり、筋力低下となること」などの問題から「④雪による閉じこもり」という4つのカテゴリーを抽出することができた。【図1】 また、物見地区の特長として、「透き通った河川や水、手つかずの様々な風景がある」ことから「①豊かな自然」というカテゴリーを、「この地域で暮らし続けたい思いやお互い様の意識を持っている人が多い」ことから

「②地域（郷土）愛」というカテゴリーを、「要介護者が少ないこと」、「介護予防講座『こけなから講座』への参加者が多い」ことから「③元気な人（高齢者）が多い」というカテゴリーを、「地域ならではの手作り食がある」、「岡山県指定重要無形民俗文化財『花まつり』があり、地区住民の誇りや宝となっていること」などから「④独自の文化・歴史」という4つのカテゴリーを抽出することができた。【図2】

ここで大切にした視点は、「課題」のみでなく高齢化と過疎化が進む中山間地域においても、まだ多くの社会資源があり、地域力が存在していることに注目したこと（ストレングスの視点）である。フィッシュボーンの手法を用い、物見地区の特長を抽出したことにより、地区内に有効な社会資源が多く存在していることが明らかとなった。この分析結果を地域住民に「見える化」し、話し合いの結果、物見の魅力を生かして、新たな地域づくりをめざしていくこととなり、この新たな取り組みを「ものみりよくプロジェクト（以下、ものみりよくPJ）」と命名し、様々な住民層の参加による地域組織化を図っていった。



把握・分析し、この結果を住民のみなさんに具体的に報告した。こうしたニーズ調査や報告会、マップ作り等を通して、地域の課題・ニーズを「可視化」できたことも大きな意義があった。

このことにより、「この地域には何の問題もない」という意識から、「何とかしていこう」という意識・姿勢へと少しずつ変っていった。

## ②地域の持つ特長を生かす

今回の取り組みでは、物見地区という地域の持つ特長に注目し、これを生かして地域課題・生活問題を解決していく視点を基本とした。中山間地域の多くは「ここには何もない」と言われるが（自分たちで「何もない」と言っているが）、『地元』の力を見出した地域こそが、これからの時代の主役としてますます伸び続けていく「自分たちのオリジナルな個性を演出できるかにかかっている」（金子弘美『地元の力—地域の創造力7つの法則』）の指摘のように「地域の宝」が重要といえる。

## ③外部の目（学生の視点・力）の活用

このような「地域の宝」をそこに住んできた人たちだけで見つけることはなかなか難しく、むしろ外部からの目のほうが発見しやすい。この取り組みでは、地域の宝を、特に学生という若者の視点・力で発見し、地元住民に伝えていった。このことで、改めて地域の良さを地域住民が自覚でき、地域を変える大きな意識の変容を可能にした。また、地域外の学生が懸命に地域づくりに取り組む姿は住民のみなさんに大きな刺激と感銘を与えた。

「こんな田舎を若い娘さんが良いところだと言ってくれた。わたらのために涙してくれた。わたらもやらねば」とと語った町内会長の言葉がこのことを示してくれている。

## ④プロセス重視を基本とした「住民活動主体の原則」の取り組み

「調査結果の報告→住民との話し合い→意見をもとに企画の提案→話し合い→取り組み→話し合い→・・・」といったように、常に地域住民の思いとのキャッチボールを丁寧に行いながら取り組みを進めた。

地域を創っていくのは、地域住民の方達であり、地域住

民の主体的な取り組みでなければ、地域の内発的な発展は生まれない。

この「住民活動主体の原則」を基に、聞き取り調査もしっかりと時間をかけ、話し合いも互いに膝を合わせて、何度も丁寧に行っていた。この結果、報告会において、「私たちは変えることが出来た」という住民の方の嬉しい言葉を聞くことが出来た。

### ⑤「場」の用意による住民の主体的参加の保障

住民同士の感情や考えの共有を進めていくためには、話し合いの「場」や「機会」を意図的に用意することが必要となる。調査結果より見えてきた、地区住民の「観客的」姿勢と、地区住民の代表意見が「中高年の男性」に特化した「役員中心の運営の在り方」を克服し、住民みんなで考え、取り組んでいくために、新たな「場」を作った。それが、地区役員・若者世代や女性、さらに地区内の保健・福祉団体の世話役、そして、地区外の包括・社協という福祉機関職員と大学生及び教員を構成員とした「ものみりよくプロジェクト実行委員会」である。

こうした「場」の意図的用意により、本来住民が持っている「地域への関心」「他者への思いやり意識」（ニーズ調査で出てきた年代を問わず「お互いに助け合う活動」「声かけ・見守り活動」が必要であるという意見）を顕在化させ、「住民の主体的活動」内発の機会とした。「場」という容れものの中において、伊丹の言うように

「人々間の共通理解が増す」

「人々からそれぞれに個人としての情報蓄積を深める」

「人々間の心理的共振が起きる」

という3つの相互作用が自然発生的にあるいは自己組織的に起きた。

（伊丹敬之「場の論理とマネジメント」より）

### ⑥生活支援のシステム化の視点

生活支援の取り組みを単なる個別の取り組みとするのではなく、支援のネットワーク化を目指していくために、津山市では、住み慣れた地域で自分らしくいきいきと暮らせるための仕組みとして、「地域包括ケアシステム」の構築を図っている。「ものみりよくプロジェクト」は、このシステムにおける「小地域ケア会議」と位置づけ、地区住民と

専門機関・職との協議の「場」・協働の「場」としての役割を担うものとして位置づけ、取り組んでいる。

中山間単なる一つの地域の取り組みに終わらず、「地域包括ケア会議」を通じて、物見地区での取り組みを津山市全体に周知し活かすことをもう一つの目的としている。

自主ゼミで取り組んでいるもう一つの「街中の過疎高齢化した地域のまちづくり」と合わせて、高齢化が進む地域での「福祉のまちづくり」を進めている。

今後も、この「ものみりよくプロジェクト」の取り組みを物見地区住民主体で、津山市包括・社協、行政、そして、美作大学が協働・連携しながら継続的に進め、高齢化・過疎化した中山間地域でのいきいきとした暮らしを実現していく方法を明らかにしていきたい。

### 物見プロジェクト 平成25年度事業報告

時期	活 動 内 容	備考
2013年 5月 5月1日 5月23日	地域探検「探検・発見・放つとけん」見守り活動開始 第1回実行委員会に向けて打ち合わせ会議 ものみりよくプロジェクト第1回実行委員会 学生より、交流会・福祉マップ作りの提案	学生2人数員2人 学生9人数員2人
7月1日 7月6日 7月28日	ものみりよくプロジェクト第2回実行委員会 交流会のチラシを各戸配布 物見地区・夏の交流会（他世代交流） （グランドゴルフ大会・ボーリングや輪投げ、バーベキュー、そうめん流し）	学生9人数員2人 学生7人数員1人 学生8人数員2人 卒業生3人
9月1日 9月29日 10月13日 10月23日 10月26日 10月27日 11月14日	福祉マップづくり ものみりよくプロジェクト第3回実行委員会 福祉マップをもとに、見守りの具体的方法を検討 世帯票作成決定 「花まつり」にむけて準備と交流（花づくり） 「花まつり」にむけて準備と交流（餅作り） 「花まつり」（物見神社）宵祭り参加（だんじり引き、地区内巡回） 「花まつり」参加 ものみりよくプロジェクト活動の写真を掲示 ものみりよくプロジェクト第4回実行委員会 世帯票の内容確認、保管運用の検討、学生による先進地視察についての候補地プレゼン	学生6人数員1人 学生7人数員2人 学生4人 学生5人数員1人 学生12人 教員2人 卒業生3人 学生6人数員2人
12月 12月15日	冬季「こけないからだ体操」開催支援 物見 世帯票配布（学生と消防団による各戸配布）	学生12人 教員1人
1月 2月16日 3月	雪かき 手伝い（学生泊り込み2～3回） 東かがわ市の南野地区の「黄色い旗運動」視察旅行（バス）岡山県物見 ↔ 東かがわ市 来年度の取組み計画策定	学生9人数員2人 学生14人 教員2人

**[引用・参考文献]**

- [1]辻英之編著(2011)『奇跡のむらの物語』農山村漁村協会, p. 231
- [2]金丸弘美(2010)『「地元」の力—地域力創造7つの法則』NTT出版, p. V
- [3]金丸弘美(2010)『「地元」の力—地域力創造7つの法則』NTT出版, p. III
- [4]大野晃(2009)『山村環境社会学序説』農山漁村文化協会, p. 190
- [5]伊丹敬之(2008)『場の論理とマネジメント』東洋経済新報社, p. 42
- [6]同上書, pp. 45-46
- [7]農林水産省「平成23年度 食料・農業・農村白書」p. 268
- [8]前掲[1], p. 231
- [9]小坂田稔(2011)「公共経営としての地域包括ケアシステムの意義」高知女子大学紀要 第60巻